

サンプル

手術から一か月――。

二週間前にガーゼも取れて、すでに痛み止めもほとんど必要なくなった頃。

「おちんちんでイってみようか」

この一か月、性行為はお預けだった。せめて篠崎だけでもと、口淫を申し出て飲ませてもらったことはあったけれど、そのほとんどを速慮されてしまっていた。とても寂しかった。けれど気を遣ってくれていたのを分かっていたので何も言わずにいた。

そして、ようやくセックスができる。

「あの、お尻、洗浄してきます」

「嬉しそうだ」

篠崎が口角を上げる。

「だって！早く篠崎のおちんちんが欲しいです」

排便も難なくできるようになったし、腫れも少しずつ引いてきた。ガーゼが取れたとき、初めて患部を見た。篠崎は「今後もお世話は俺がするのだから」と無理して見なくてもいいと言ってくれたけれど、気になったのだ。身体がどうなったかではなく、『篠崎の目にどう映っているのか』が。正直に言えばとても怖かった。グロかったら、ぐちゃぐちゃだったら――けれど篠崎が一生懸命選んでくれた病院に間違いはなかった。縫合の痕はあったものの、とてもきれいな仕上がりだったのだ。篠崎の献身的なケアのおかげかその頃には腫れもほとんどなく、まるで最初からタマなどなかったかのような股間だった。

そのすつきりしたそこにとても感動したのを覚えている。おちんちんはあったけれど、突起はそれだけのすつきりした股間。篠崎はよく頑張ったなとたくさん褒めてキスをしてくれた。そして完全に腫れが引いたらそこをたくさん舐めようと言ってくれた。楽しみでしかがたなくて、お願いをした。「腫れが引いたら素股もしてください」と。篠崎は少し驚いていたけれど「楽しみだ」と、タマがあったところを優しく撫でてくれた。

今はまだ舐めてもらうことも素股をしてもらうこともできないけれど、抱いてもらうことはできる。どういう風にいくのか分からないけれど、もしかしたら射精もできるかもしれない。

「じゃあ、洗浄は一緒にしようか」

「え……」

「恥ずかしいか」

「恥ずかしい……けど、してくれませんか」

「風呂に行こう」

ガーゼがなくなつてからは歩きやすくなった。早歩きはできないけれど、普通に歩くことはできる。手を繋いで浴室に向かう。服を脱がせてもらって、それから下着を脱がせてもらうときにはおちんちんにキスをしてもらった。

「可愛い」

「ん……今日はいっぱい可愛がってください」

何と言つても今日は一か月ぶりのセックスなのだ。たくさん撫でられたいし、褒められたいし、虐められたい。

「もちろんだ。待てないから洗浄中も可愛がらせてくれ」

「やん……」

すり、とおちんちんを撫で上げられて感じてしまう。まだ今から洗浄があつて、それまでダメなのに。

「嫌じゃないだろう。早く可愛がりたい」

「んっ……」

やわやわと揉むその手付きはタマにされていたのと同じだ。優しく包むようにして、そして感触を楽しむように揉まれる。

「あん……」

「おちんちん、勃起するかな」

「……勃起しなくても可愛がってくださいすか」

「もちろん」

※ ※ ※

裸のままベッドに寝転がる。洗浄のときから揉まれ続けたおちんちんはすでに限界だったけれど、なんとかあと一步のところまで踏み留まっていた。

「指を入れるよ。久しぶりだから、少しいきんでくれるか」

日常的にセックスをしているときならばそれほどアナルが硬くなることはない。ほどほどの柔らかさのまま次のセックスになるからだ。その頃はいきむ必要なんてなくて、むしろ宛がわれた指やおちんちんを早く早くとアナルが勝手に飲み込んでしまっていた。けれど今は違う。久しぶりだから念入りな慣らしが必要だった。それがひどくもどかしい。

「んっ」
「そう……いいぞ、上手だ。諒くんのアナルはやはり優秀だな。指の啞え方をちゃんと覚えている。もう指が根元まで入るよ」

篠崎の言う通りだ。指はしつかりと入っているけれど圧迫感は微塵も感じられない。アナルはちゃんと篠崎の身体を覚えていた。それが嬉しい。

「これならすんなり解れるかもしれないな。もう一本増やすよ」

二本は少しだけきついと感じた。それでも深く息を吐けばあつと言う間に馴染んでしまう。

「すごいな……こんなに柔らかいとは思わなかった」

恐らく洗浄のときに少し解したからだ。いや解したというほどのことはされていないけれど、それで身体が受け入れることを思い出したのだろう。それに全くの処女と比べれば身体の力の抜き方は分かっている。

「ご褒美に気持ちいいところをコリコリしてあげよう」

「あつ！あああつ！」

篠崎も安西のいいところを忘れてはいなかった。コリコリと的確に前立腺を捏ねられる。気持ち良くて、腰が浮いてしまう。おちんちんを押し上げるような動きをしてしまう。

「あんっ、あつ」

「腰を振って……いやらしいな」

「やあんっ」

恥ずかしいから言わないでほしい。でも言われなかったらきつと寂しい。もっとたくさん言葉でも虐めてほしい。

「もう一本増やすよ」

「んっ」

一度指が抜かれローションが足された。そして更なる圧迫感を持って、それでもスムーズに三本の指が挿入された。

「ああ、すごいな。柔らかいのにきつい。入れたら気持ち良さそうだ」

「入れて……もう入れてください」

「ダメだよ。まだこれでは切れてしまう」

「やだあつ」

一体いつになったら入れてもらえるのだろうか。篠崎は苦しくないのだろうか。まだ始まったばかりだと言うのにもう欲しくてたまらない。何時間もお預けをくらったような気持ちになってしまう。

「もう少し、三本が馴染んでスムーズに動かせるようになるまではダメだ」

「動かしてっ、痛くないからあつ」

痛みはない。ただ圧迫感があるだけだ。だから動かして欲しい。動かしてもらった方が早く馴染む。

「全く……諒くんは本当にえっちなこだ」

軽いため息のような音が聞こえ、背筋が冷える。

「あつ……ごめんなさい」

「違う。可愛すぎて困ったなと思ったんだ。我慢が利かなくなってしまう」

「我慢しないで」

我慢なんてそんなものではない。だって少しでも早く入れてほしいのだ。今すぐにでも欲しい。篠崎の大きなおちんちんが欲しい。

「……切れたらどうする」

「痛み度に篠崎のおちんちんを思い出します」

言った途端、珍しく強引な仕事で指が抜かれた。そしてすぐに宛がわれる太いもの。何かなんて考えなくてもわかった。待ち望んでいたものを、ようやくもらえる。

「息を吐いて」

いつもより早口。余裕のなさが窺われた。その様子に昂る。

「はい……」

「いきみなさい」

「んっ……ああああ！」

圧迫感と、痛み。ピリつとしたので切れたかもしれない。でも構わない。篠崎の興奮がとにかく嬉しか

った。

「あああああ！」

「つく、きついな……」

篠崎の顔を見上げる。苦しそうに歪んでいた。

「あつ……痛い？しのぎき、痛い？」

早く欲しいとおねだりをしたから、篠崎はそれを叶えてくれただけなのだ。冷静に考えれば狭すぎるところに捻じ込めれば、繊細なおちんちんは痛みを覚える。なのに自分の欲望ばかりを訴えてしまっていた、と今頃気付く。

「痛くないよ。大丈夫……痛いのを諒だろう」

確かに篠崎のそれは萎えてはいない。硬いままだ。よかった、篠崎が痛みを感じなくてよかった。でも、それなら早く――。

「いいつ、痛くてもつ、篠崎がほしいつ」

もうもらっているのだけれど貪欲な願望は際限なく精を求めた。おちんちんの挿入だけじゃ足りない。たくさん擦って、最奥に子種がほしい。

「諒……動くぞ」

「んっ、んっ」

もう、アナルなんて壊れてもいいと思った。篠崎に使ってもらえるなら、壊れてもいい。

篠崎の律動が始まった。痛い。痛いけれど、気持ちいいところを擦られる。ゴリゴリと強引な快感を与えられ、痛みが消えていく。痛みより快感が勝っていく。

「ああああつ！！」

「諒……」

篠崎の声が苦しそうだ。萎えてはいないから本当に痛みはないと思うのだけれど心配になる。

「しのぎきつ、くるしつ？」

喘ぎながら、なんとか言葉にすれば無理矢理口を塞がれた。

「んんっ、ふんんんん！」

舌が吸われ息ができない。激しい腰の動きと咥内を暴かれる強い快感。前立腺からの快感も久しぶりで、飢えていた身体は少しの快感も逃すまいと必死に全てを拾い上げてしまう。

「んんんっ！！！！！！」

篠崎の動きが止まった。まさか――

「……すまない」

「しのぎき……嬉しいです」

篠崎が射精してくれた。安西をイかせようとすることなく、ただ篠崎が射精をした。それが嬉しかった。それにいつもよりかなり早い。それも嬉しい。だってそれほど安西の中を気持ちいいと思ってくれたということなのだ。

「諒……すまない、諒もイきたいだろう」

「いえ……なんか、篠崎が射精してくれたので、心が満たされちゃいました……」

そう言うとき篠崎はおかしそうに笑った。でもきつと照れ隠しだ。こんな顔が見られるのなら、お尻を切るのも悪くない。恥ずかしいけれど、篠崎はきつと朝晩二回お尻にお薬を塗ってくれるはずだ。

半年後――。

「さあ、おちんちんを測ろうな」

「はい……お願いします」

朝起ちがなかったので、おちんちんは今柔らかい状態だ。最近では衣類を何一つ身に纏うことなく過ごしているので篠崎の手がストレートにおちんちんを掬う。

「皮を剥くよ」

「はい」

おちんちんは少しずつ小さくなってきたように思う。毎日見ているからあまり実感はないのだけれど、篠崎が毎日ファイリングしてくれている記録を見ると、計測の誤差はあるものの着実に小さくなってきている。

しかしその『小さくなる』は中身だけなのだ。皮は萎まない。だからおちんちん本体のサイズを測るためには少なくとも先端を出す必要があった。

「んっ……」

「諒、気持ち良くなつてはいけないよ。おちんちんが勃起したら測れなくなってしまう」

叱るように篠崎は言うけれど、実際にはそんなことはない。だって小さいおちんちんを計測したあとは

わざと勃起させて、そちらのサイズも測るのだから。今日は勃起していなかったから柔らかいおちんちんを先に測るだけで、朝起ちがあれば勃起サイズから先に測る。でも、叱られるのもスパイスなのできちんと謝る。篠崎だって本気で怒っているわけではない。

「おちんちん、ごめんさい」

しゅんと言えば、篠崎はごめんさいが言えたことを褒めてくれる。

「いいこだ。じゃあ、おちんちんどうしようか。少し勃起してしまったよ」

これじゃ中途半端でどちらとしても測れない、と篠崎は困ったように言う。つまりどちらかを選べということだ。

「……おちんちん小さくしてください」

「柔らかいから測るのか」

篠崎は少し意外そうに言った。

「……おちんちん小さくして、そのあとまた勃起させてほしいんです……」

「そんなに……ああ、おちんちんを酷使されるのか」

「っ……」

酷使。そうだ。それだ。大きくしたり小さくしたりと繰り返し返させられたい。そういう虐め方をされたい。だって、本当の意味での酷使——おちんちんを性器に入れて何度も無理矢理射精させられる——はできないから。だから、硬くさせられたり柔らかくさせられたりを何度もされたい。

「タオルを取ってくる」

篠崎は口角を上げて言った。そしてそのまま寝室を出て行ってしまふ。恥ずかしい部分を隠すものもない状態でただ待つというはそれだけで羞恥心を煽るし、何だか心許なくて不安にもなる。でも多分、それすら篠崎は分かっている。だってこれがもし体調不良なら優しく布団を掛けてくれるはずだから。

「篠崎……」

早く。早く戻ってきてほしい。じゃないとおちんちんがもつと硬くなってしまふ。今からされる残酷な行為に期待をして。

「諒、お待たせ」

「しのざきっ」

「……触ったのか」

触っていない、と即答した。触っていないのに、想像だけで完全に勃起してしまったのだ。

「いやらしいおちんちんだ。こんなに小さいのに、欲に忠実だな」

そう言っただけでもなお余る皮を指先で突かれる。

「あっ、ん……」

今から小さくしてもらおうというのに、そんなことをされたら小さくされてもすぐに勃起してしまいそうだ。

「しのざき、早く……」

「うん？」

「早く、おちんちん小さくしてください……」

「もつと小さくなるのか」

ひどいからかいだ。勃起していても小さいのに、もつと小さくなるのか、なんて。

「はい……赤ちゃんみたいな小さいおちんちんになります」

篠崎は満足そうに笑った。その笑顔にもドキドキしてしまっただけで、アナルが疼く。もつと虐められたい。もつと意地悪なことを言われて、虐められて、可愛がられたい。

~~~~~

「大丈夫、そんなことはしない。けれど舐めていたい、口に含んでいたい」

篠崎の視線からその真意を見る。ああ、きつと飴の代わりになるのだ。

「……お口に入れてください」

「誰の口に、何を？」

「篠崎のお口に、僕のおちんちんを」

「ここでは無理だな」

「……仕事は……」

「……今は大丈夫だ」

篠崎の手を引いてリビングに入る。すると篠崎はソファに寝転んでしまった。

「少し疲れたから横になるよ」

「……はい」

仰向けになった篠崎の身体を跨ぎ、おちんちんを口に当てる。篠崎の口はすぐに開いた。けれど腰を引き寄せるようなことはしてくれない。あくまで安西が自ら口におちんちんを入れなければならなかった。

「……食べて……」

「ああ」

数センチしかない小さなおちんちんはもう硬くなることはない。強すぎる快感から守ってくれるはずの皮ももうない。真っ赤で剥き出しの亀頭が唾内に消えた。

「あああああ！」

少しの慣らしもなく、篠崎の舌が亀頭を撫でた。強すぎる刺激に思わず腰を引くが予知していたのかいつの間にか腰に回されていたらしい腕がそれを阻止した。

「あああつ！！やああああ！」

強い。あと少し強ければ痛みと感じる刺激だった。けれど篠崎はその辺りのさじ加減も絶妙で、快感だけを与えてくる。

安西はこんなにつらいのに、篠崎にしてみれば安西の粗末なおちんちんなど親指を啜える程度のことではない。小さすぎるせいで、おちんちんは唾内で自由に弄ばれてしまう。右に弾かれ左に揺られ。

「ああつああつああつ！」

絶え間なく漏れる嬌声。口を閉じる余裕もなく涎が顎に垂れた。

「あああああ！」

ぐじゅ、と水音と共に強い吸引。出ちゃう。何が出るわけでもないのに、吸い取られてしまう気がした。

「あああああ！！」

ぬるぬるした舌で亀頭を弾かれ、小さく柔らかいおちんちんはびたんびたんとして左右に揺れる。気持ちいい。舌でビンタされている。その度に亀頭が擦れ、言葉にならない快感が襲う。

「やあああああ！」

もうやめて、助けて、そう思うのに篠崎は今度は飴を舐めるように舌で亀頭を転がした。気持ちいい。いきたい。つらい、もうやめてほしい。

けれど腰を引くことも許されない。安西が望んで篠崎の口に亀頭を含ませたのだ。

「あああああ！あああああ！」

いきたいのに、篠崎は亀頭を弾くばかり。寝転んでいて、上に安西の身体があるのだから当然なのだけれど、竿を抜いてはくれない。少しでも腰を浮かせることが許されれば篠崎も顔を前後させる余裕が生まれるのに。でも篠崎にその意思はなかった。ただひたすら敏感な亀頭だけを転がしている。

「あああ！だめっ、もおだめええええ！」

いきたいいきたいいきたいいきたいいきたい。

おかしくなる、そう思ったときに、舌でおちんちんが押し出された。

「あ……」

「ご馳走様。美味しかった。さあ仕事に戻るよ」

「あ……」

身体を押され、篠崎が上体を起こした。

「しのごき……」

「うん？」

「……おちんちん……」

「うん、とても美味しかったよ。また疲れたら舐めさせてくれ」

「……はい……」

篠崎は満足気に頷くと俯く安西の頭を一撫でして廊下に消えた。おちんちんはびくびく跳ねたけれど、触れることは許されていなかった。

くくくく

「可愛いだろう」

小さなおちんちん、その先端の真っ赤な亀頭。そこに金属の玉があった。

「ア。パドラビアという。尿道を通して亀頭を貫通しているんだよ」



シャー

「いだいいいいい！」

「うん、痛いな。でも上手におしっこできてる」

「いだいいいいい」

おしっこはなかなか止まらない。ピアスが尿道を貫通しているせいで排出の邪魔をしているのだ。痛みは強いし、なかなか排泄は終わらない。最悪だ。けれど、頑張ればキスをしてもらえる。

「ああああ！いだいいい、痛いいいい！」

「痛いな、痛いな……」

篠崎もぎゅうぎゅうと抱きしめる腕に力を込めてくれる。嬉しい。守られているみたい。痛みは変わらないけれど。

「あ……あああ……」

激痛に耐えていると少しずつ排尿の勢いが和らいだ。終わりが見えてくる。ほっと息を吐く。

「うん、上手におしっこできた。痛かったのによく頑張ったな」

~~~~~

「ん……？」

なんだか寝心地がいつもと違う。ベッドが固い。枕が篠崎の腕じゃない……頭がぼーっとする。風邪だろうか、篠崎はどこ……しのぎき……

「しのぎ……」

「諒、」

「……」

「……しのぎ……？」

「諒、大丈夫か」

「しのぎき……？」

目を開けて、ここがどこか確認する。病院のようだ。なぜ病院——？

篠崎が横にいる——事故？頭がくらくらする。

「諒、諒」

「うん……僕……」

「気分はどうだ」

「うん……」

眠かった。とても眠くて、そのまま眠ってしまった。

「ん……」

次に目が覚めたとき、篠崎はそこにいなかった。まだ頭がぼーっとするけれどさつきほどじゃない。寝すぎて頭が重いような、そんな感じだ。

ここはどこだろう。ベッドの周りにカーテンがある。病院のようだ。それも個室だ。広い部屋。しかしベッドはこの一台だけ。

さつきは篠崎がいたような気がしたけれど、それとも夢だったのだろうか。事故にでも遭って運ばれたのだろうか。

でもそれにしては痛みがない。身体は重いが、麻酔でも効いているのだろうか。

まだ頭がぼーっとしている。思考が定まらない。ええと、どうしてここに——

「諒」

隣から聞こえた声。いつからいたのだろう。気が付かなかった。

「しのぎき……？」

「目が覚めたのか。すまない、不安にさせたな。飲み物を買ってきたんだ」

「あの……」

「もう、終わったよ」

終わった、とは一体何のことだろう。

思い返してみても、昨夜篠崎に体中を愛されて、特に普段より念入りにおちんちんを愛撫してもらって、おちんちんあってよかったって泣いて、そうしようやくイかせてもらって……そして満足して眠ったと

ころまでしか覚えていない。頭でも打って記憶がおかしくなったのだろうか。テレビとかで観る、事故に遭って数か月分の記憶を失っているとか、そういうのだろうか。

でもそれにしては篠崎に焦りの様子が無い。事故にでも遭えばきつと篠崎はひどく取り乱してくれるはずだ。風邪を引いただけでとても過保護になってくれる人なのだから。

「身体の痛みはどうだ」

ベッドの隣には椅子があるらしい。篠崎が座った。顔をそちらに向ける。頭や首に痛みはない。

「あの、僕……………」

「手術はちゃんと成功したよ」

「手術……………」

手術とは一体何のことだろう。やはり事故にでも遭ったのだろうか。記憶はないけれど、どこかに外出していたのだろうか。一人では出掛けないから、それならきつと篠崎も一緒だったはずだ。篠崎に怪我の様子が無いことに安堵する。

「しのぎき……………」

「……………諒、おちんちんが痛まないか」

「え……………いえ……………」

痛みと言うより締め付けられているような感じはある。腹回りを固定されているような。腰を打つ事故だったのか。

「まだ麻酔が効いているんだろう」

「あの、篠崎、僕……………」

何があったんですか、そう訊こうとしたときだった。

「諒が眠っている間に、おちんちんを切除しておいたよ」

「え……………?」

「股間がすつきりしていないか? ああ、まだ固定されているからわからないか。もう、おちんちんはないから諒はもつと可愛くなれるよ」

「あ……………え……………? え……………?」

~~~~~

おちんちんを弄れないのが寂しい、と篠崎は夜に酒を飲みながら一冊の本を取り出した。

「何ですか」

「大切なアルバムだよ」

その言葉で分かった。それは本ではない。アルバムだ。安西のおちんちんが小さくなっていく記録。

篠崎は一ページ目からゆっくりとページを眺めていく。そこにはまだ大きな——一般的なサイズから言えばかなりの短小なのだが——おちんちんの写真があった。そして隣にはきれいな字で撮影日と、測ったサイズ。そして篠崎の感想が書かれていた。

恥ずかしい。篠崎は「見なさい」とは言わないので見る必要はないのだけれど、篠崎に愛されたおちんちんの記録だ。今はなきおちんちんの記録。気になって横から覗き込んでしまう。

「諒くんも一緒に見る?」

「……………はい」

それは想像以上にきれいにまとめられていた。これだけ見ても、どれほど篠崎が愛情を注いでくれていたかが分かる。

「ほら、可愛い。子供みたいなおちんちん」

「や……………」

まだ手術直後の写真だ。勃起したおちんちんの下にガーゼが見える。

「手術して、痛いのにおちんちん勃起させて可愛い」

「だつて……………」

「だつて?」

「篠崎が、えつちなキスするから……………」

「痛い痛いって泣いてた翌日にキスで勃起するとは思わないだろう」

「だつて……………篠崎のちゅう気持ちいい……………」

「したい?」

「したい……………けど、アルバムも見たい……………」



「じゃあ最後まで全部見たらたくさんキスしようか」

「えっちなキス？」

「うん、諒くんが大好きな、セックスみたいなキス」

「あ……」

バレていた。時折篠崎がする、舌を出し入れするキスをセックスみたいだと感じていたことに。それが大好きで、まるでお尻におちんちんを入れられているみたいと思っていたことを。

「早く……」

「ダメだよ。可愛いおちんちんだからしっかり見ないと」

篠崎は一枚一枚しっかりと見て、時折その頃の安西の様子などを話しながらゆっくりとページを捲った。早くしてほしいのに。

「ああ、ほら、ここだ。これが、包茎の最後の写真」

「やあ……」

おちんちんがあつた場所がむずむずする。そういえば、以前篠崎が言っていた。普通の陰茎切除ではおちんちんの奥の組織も弄るのだけれど、安西の切除は単におちんちんを根元からばっさり切り落としただけだ。だからもしかしたらおちんちんの生えていた場所にはまだ感じられる神経や組織が残っているのかもしれない。

「皮がこんなに余って。ほら、おちんちんの皮を剥いた写真もあるけれど皮が余り過ぎてカリが少し隠れてしまっているよ」

恥ずかしい。でも事実だ。包茎手術を受ける前、皮は確か六センチか七センチあった。けれどそのときおちんちん本体はすでに三センチ程になっていたのだ。単純計算で皮はおちんちんの倍の長さがあった——いや、おちんちんが半分の大きさに縮んだということだ。それをぶらぶらさせながら生活していた。

「ごらん、リボンが可愛い」  
指された先の写真は余った皮に篠崎がリボンを結んでくれたものだ。皮の先っぽがきゅつと締まっている。

「懐かしい……諒くんも覚えていたのかな」

「はい……おしっこ、恥ずかしかったです」

「ああ、そうだな……恥ずかしがっている顔はとても可愛かった」

その頃おちんちんの余った皮を縛られてしまっているせいで、排尿の度に解いてもらう必要があつたのだ。その頃から排尿は篠崎に後ろからおちんちんを支えてもらって行っていたのだけれど——

約九万文字あります。

宜しくお願い致します。